はじめに

国際化・情報化の著しく進展している今日、自分の意思を的確に表現する能力を養うことは今日的な課題で
あると思う。

国語科教育の中で、『書くこと』すなわち『作文』の教育は、当然のことながら、その歴史の中で重視され
継続され続けてきた。その伝統は、どのようにして形づくられ、日々の実践の中に生かされてきたのであろ
か。ここでは、明治初期から昭和二〇年ころまでの作文教育の歴史的な展開をそとしながら、その実践の足跡や

今後は、社会人として必要とされる言語能力の基礎を確実に育成していくことは急務のこととなっ
ている。平成五年度から学年進行により実施されている学習指導要領（国語）の中で、適切に話

表現Ⅱ、『国語総合』、『現代文』、『古典』、『古典講読』とされている。国語の科目構成は、『国語表現Ⅰ』、『国語
表現Ⅱ』及び『国語総合』のうちから一科目を選択することになっている。そのうち、必履修科目として、『国語
表現Ⅰ』及び『書くこと』及び『聞くこと』及び『書くこと』の領域を中心とした科目の必修は初めてのことである。
時代の要請にこたえる科目構成となったわけ

なお、史的展開のうち、中学校と高等学校の間で重複している事項について、中学校の箇所で重点的に

本論において、作文教育史の一端を明らかにすることが、今後の作文教育の進展につながることになれば幸
いである。
中学教則略（明治五年九月八日 文部省布達）

（一）教則の主旨

この布達によれば、修業年限は、下等中学は「四級より」六歳までの三箇年、上等中学は「七級より」一九歳までの三箇年とした。尚、下等とも第一級から第六級までに区分されている。

国語関係では、「国語」、「国語古言」「習字」の教科目が設けられているが、その実態については判然としない点も多い。

愛媛県の例

こうした法令を踏まえて、種々の学校が設立されていったが、愛媛県布達の規則例を挙げてみる。

改正松山中学校規則（明治一一年六月二日布達）

此の規則によれば、甲科（およそ五年）、乙科（およそ三年）を設けている。甲・乙科を比べてみると、乙科には英書科がなく、習字科が設けられている。

作文教育の史的展開
### 甲科業表

<table>
<thead>
<tr>
<th>毎週時数</th>
<th>一</th>
<th>二</th>
<th>三</th>
<th>四</th>
<th>五</th>
<th>六</th>
<th>七</th>
<th>八</th>
<th>九</th>
<th>十</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>級期</td>
<td>各</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
</tr>
<tr>
<td>学年</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>朝</td>
<td>漢</td>
<td>書</td>
<td>科</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>一</td>
<td>八大家読本</td>
<td>八大家解本</td>
<td>文章軌範</td>
<td>史記</td>
<td>春秋左氏伝</td>
<td>日本政記</td>
<td>近世日本外史</td>
<td>續十八史略</td>
<td>和歌史略</td>
<td>續国史略</td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>和文漢訳</td>
<td>和文漢訳</td>
<td>和文漢訳</td>
<td>和文漢訳</td>
<td>和文漢訳</td>
<td>和文漢訳</td>
<td>和文漢訳</td>
<td>和文漢訳</td>
<td>和文漢訳</td>
<td>和文漢訳</td>
</tr>
<tr>
<td>三</td>
<td>漢文諸体</td>
<td>漢文諸体</td>
<td>漢文諸体</td>
<td>漢文諸体</td>
<td>漢文諸体</td>
<td>漢文諸体</td>
<td>漢文諸体</td>
<td>漢文諸体</td>
<td>漢文諸体</td>
<td>漢文諸体</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 乙科業表

<table>
<thead>
<tr>
<th>毎週時数</th>
<th>一</th>
<th>二</th>
<th>三</th>
<th>四</th>
<th>五</th>
<th>六</th>
<th>七</th>
<th>八</th>
<th>九</th>
<th>十</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>級期</td>
<td>各</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
<td>前</td>
</tr>
<tr>
<td>学年</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>朝</td>
<td>漢</td>
<td>書</td>
<td>科</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>一</td>
<td>政体書</td>
<td>政体書</td>
<td>政体書</td>
<td>政体書</td>
<td>政体書</td>
<td>政体書</td>
<td>政体書</td>
<td>政体書</td>
<td>政体書</td>
<td>政体書</td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>十八史略</td>
<td>十八史略</td>
<td>十八史略</td>
<td>十八史略</td>
<td>十八史略</td>
<td>十八史略</td>
<td>十八史略</td>
<td>十八史略</td>
<td>十八史略</td>
<td>十八史略</td>
</tr>
<tr>
<td>三</td>
<td>博物学</td>
<td>博物学</td>
<td>博物学</td>
<td>博物学</td>
<td>博物学</td>
<td>博物学</td>
<td>博物学</td>
<td>博物学</td>
<td>博物学</td>
<td>博物学</td>
</tr>
<tr>
<td>四</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
</tr>
<tr>
<td>五</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
<td>綱国史略</td>
</tr>
<tr>
<td>六</td>
<td>論説文</td>
<td>論説文</td>
<td>論説文</td>
<td>論説文</td>
<td>論説文</td>
<td>論説文</td>
<td>論説文</td>
<td>論説文</td>
<td>論説文</td>
<td>論説文</td>
</tr>
</tbody>
</table>
文を中心とした漢文教育の中での実践であった。なお、甲・乙科ともに「書簡文」すなわち「書簡文」が多く取
<table>
<thead>
<tr>
<th>教授要旨</th>
<th>和漢文法殊・必要ノ学科ニシテ最モ精密ニ教授スヘキモノタリ。コレヲ分テ読書作文ニトス。</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>読書ハ講読カヲ養ヒ作文用ニ資スルノ学科タレハ、其コレヲ授クルニハ初等中学科ニ至リテハ文ヲ授ケ、書簡文ヲ仮名交リ文ハ近世ノ文体ヲ醸ヒ雅謳ナルヲ主トシ、高等中学科ニ至リテハ詩ヲ作ヲラシムヘシ、凡ソ文章ハ文義簡明ニシテ言詞ヲ応ヲ行文ヲ敏桂ナルヲ主トシ、且詩歌ハ韻調ヲ軽メヲ。文ハ漢文ニ近トス。</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>文漢和</th>
<th>科学</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>本年</td>
<td>第一年</td>
</tr>
<tr>
<td>作</td>
<td>仮文書 correlated with 読書文</td>
</tr>
<tr>
<td>仮文書 correlated with 読書文</td>
<td>第一級</td>
</tr>
<tr>
<td>読書</td>
<td>上級</td>
</tr>
<tr>
<td>論述</td>
<td>上級</td>
</tr>
<tr>
<td>論述</td>
<td>上級</td>
</tr>
<tr>
<td>論述</td>
<td>上級</td>
</tr>
<tr>
<td>論述</td>
<td>上級</td>
</tr>
<tr>
<td>論述</td>
<td>上級</td>
</tr>
</tbody>
</table>

各等中学校毎級数教科課程及教授時数

正規ニシテ趣向ノ優美ナルヲ求メ、（傍線ハ引用ヲ）
作文教育の歴史的な展開

【中学校令】（明治十九年四月一日勅令に基づいて、中学校は高等中学校と尋常中学校とに分けられたが、現成中学令は省略）

【尋常中学校ノ学科及び程度】（明治十九年六月三日、文部省令）
この省令により尋常中学校の修業年限は五箇年と決められた。
学科としては、初めて国語及び漢文が登場し、以後昭和六年一月「中学校施行規則」の改正で国語漢文
となるまで継続されることになるのである。

○漢文交り文及び漢文講読書取作文

国語教育の中で、漢文は相変わらず重視され、「漢文作文」を明記したのである。

○漢字交り文及び漢文講読

漢文の「書取作文」が削除されることになったのである。
国語科における漢文学習の目的は、読解にある

「省令説明」でも「国語上二二に漢文八客リト」とあり、その在り方を解説している。

なお、毎週授業時数も「七・七・七・七」増加される。

愛媛県の例

この当時の実態を次の県令にみることにする。

愛媛県尋常中学校規則（明治二八年四月九日）愛媛県令

教授要旨及びその程度
<table>
<thead>
<tr>
<th>国</th>
<th>国</th>
<th>国</th>
<th>国</th>
<th>国</th>
<th>国</th>
<th>国</th>
<th>国</th>
<th>国</th>
<th>国</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
</tr>
<tr>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
</tr>
<tr>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
<td>国</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 附录

本附录包含关于[附录内容](#) 的详细说明。
中学校教授要目（明治三五年二月一日文部省訓令）

四中学校教授要目（明治三四年三月五日文部省訓令）

ア要目の主旨

国語及び漢文、普通言語及び文章のための、解説した、正しい、自由な思想、表現、スルノ能力も、得し、シメン学術上ノ趣味ヲ養ひ兼テ、智徳ノ発展ニ資シトル、以テ要目トス、国語及び漢文ハ、現時ノ国文ヲ主トシテ、講読セシメ、進ミテハ、近古ノ国文ニ及ブヘシ。傍線は引用者。ここには、国語科の基本的性格が明確に示され、今後の方向付けがなされたのである。

【要目】では、国語及び漢文を講読に、文法及び作文に、習字に分け、各学年毎の指導内容を極めて具体的に、詳細に示している。作文教育の主な展開を考えていくうえで、重要な位置を占めるもので、これ以後の作文に関する部分をまとめるとき、次のようになる。

国語及び漢文

畳取
仮名遣ヲ正シ、漢字ノ字画ヲ正確ナシ、且つ速記ノ慣習ヲ養フヘシ

作文

第一学年

毎週七時（講読五時、文法及び作文一時、習字の一時）
ここでは、作文を「書取、復文、訳文、作文」に分けて、その指導内容について詳細に明示することとし、また、文章の種類についても、書翰文、記事文、伝記文、論説文等、多種にわたっており、これ以後の作文教育に大きな影響を与えるのである。さらに、それぞれの文章について、「予め其ノ構造ヲ示スヘシ」と指示している点は注目してよい事項である。
作文教育の史的展開

<table>
<thead>
<tr>
<th>一年</th>
<th>二年</th>
<th>三年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>記事文</td>
<td>叙事文</td>
<td>論説文</td>
</tr>
<tr>
<td>文書文</td>
<td>簡文</td>
<td>計</td>
</tr>
</tbody>
</table>

作文の実践に当たって、東京高等師範学校附属中学校では、「東京高等師範学校附属中学校作文」を教科の目的、教科の材料、教科の方法、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのこと、作文の実践に当たってのご
<table>
<thead>
<tr>
<th>0010</th>
<th>01</th>
<th>11</th>
<th>0010</th>
<th>10</th>
<th>0010</th>
<th>11</th>
<th>0010</th>
<th>11</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0010</td>
<td>01</td>
<td>00</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>00</td>
<td>11</td>
<td>00</td>
<td>11</td>
</tr>
</tbody>
</table>

图

189
さらにまた、「批評」、「添削」、「評語」の在り方について、次のように記述している。
当時の実践の内容を

一、批評についての標準

二、組織は整然たるや否や。

三、首・尾・中要等の各段の関係適当なりや否や。

四、行文流暢なりや、難渋なりや。

五、思想は豊富なりや、欠乏なりや。

六、勢力ありや否や。

七、所説は正当なりや、不当なりや。

八、誤字・仮名ちがひは如何。

九、思想と文章とよく調和せりや否や。

十、文字の巧拙及び正否如何。

十一、添削についての標準

一、題意に合はざるもの、若しくは主意の甚しく不明なるもの、行文の甚しく拙劣なるものは添削を加べ。

二、生徒の言はんと欲する所と、反対の意味をなすやうに添削すべきからず。能く生徒は何と言はんと欲する

三、信の訛り、仮名遣ひの誤りを正すべし。

作文教育の史的展開
四、語法の誤りを正すべきし、
五、句読点の誤りを正すべし、
六、段落の誤りを正すべし、
七、修辞の誤りを正すべし、
八、事実の誤りを正すべし、
九、誤れる思想を正すべし、
十、論理の誤論を正すべし、
十一、誤論を下すに就いての標準
主意明瞭なるか、不明なるか、
不足なるか、不明なるか、
異も、子は正しくか、誤り多きか、
由来之の諸点を考察して評語を下すべき、
其引用が長くならざるが、
当時の文章推敲の望ましが在り方を詳述しておき、
この当時の作文教育の実情のよく
分かる示唆に富む教授細目となっている。

ウ 入学試験問題例
毎日の習字は、上級学校進学に当たって、
どのような試験が実施されるかということに左右されることが多い。
思想

思想的形式上、最も普通で且つ最も重き欠点は、題意に関連して浮び来る思想の短絡を取って縦めて一つの組立て力の、甚だ弱いことである。換言すれば、思想の不精確なることも、亦多くに通じての欠点である。

文章法の誤謬を記入せることの、述べて居らぬことである。

修辞的誇張の極端なる弊に陥って居ると認めるもののが、文法からずある。

文中向々事実の誤謬を記入せることの、述べて居る者も錯乱の欠乏に依ること勿論であるが、他に例等が文を作

思想発表の形式

○単句の構造の、成るごは言語の使用の不熟と認めて、ことに挙げる。

○比喻語と形容語との多いごは、前にも云ったが、此の両者と擬人法との三つは殆ど非用せられて居る。

必要的ない場合のみならず之が為に、却って意味を不明にする場合にも、之を用へ居る。
○ 送り仮名法
○ 送り仮名法は現今一定して居ないから、人に依って区々たる止むを得ないけれども、一人の文章の中で一定して居られないものがある。又たまたま仮名を送って居ることは注意せねばならない。

钌字の使用
○ 錫字の多いことは驚くべきものがある。最も多くは字音又は訓音の近似せる他字、及び字画の近似せる他字の使用、及び訓名の類似せる似而非文字の使用である。
○ 平仮名及片仮名を混用したのが最近の一例三分強ある。
○ 答案中に文字の拙悪なもののがかなり多くあるである。

受験準備のための勉強方法や注意事項を述べたものので、問題集と異なって受験者の心構えなどを説いてい

(五) 中学校教授要目改正
（明治四四年七月三一日文部省調令）

ア要目の主旨
この要目は「中学校令施行規則中改正」（明治四年七月三一日文部省調令）に基づいて公布されたものであ

施行規則」では、「国語及漢文」の目標・内容を次ののように示している。

国語及漢文は現時ノ国文ヲ主トシテ講読セシメ進ミテハ近古ノ国文ニ及ホシ又平易ナル漢文ヲ講読セシメ
作文を「簡易ニシテ実用二適スル国文ヲ作ラシメ国語文法ノ大要ヲ習ヲ授ケスヘン

簡易ニシテ実用ニ適スル国文ヲ作ラシメ国語文法ノ大要ヲ習ヲ授ケスヘン

作文を「簡易ニシテ実用ニ適スル国文ノ」に従って教えるとされているのである。作文の教育において、「簡易ニシテ実用ニ適スル国文ノ」の考え方は、作文に関する事項を次のように示している。

作文、作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ

作文ノ模範トスヘキモノをルヘシ
作文

第三学年
毎週二時（国語講読）及隔週一時
作文講読
作文

第四学年
毎週二時（国語講読）
作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文

作文
添削の在り方を指示したこと。作文教育も、明治期の後半になって、一応のまとまりを見せ、その考え方が指導内容は以後長く継続される

文範の一つ

人生（大町桂月）人は何をつけて立つ（久津見原村）天然と仏舎（高山樗牛）上野と深草（斉藤緑雨）登山

文範の一つ

漢の生活（徳富蘇峰）中井喜太郎に（尾崎紅葉）白河緱洋に（大町桂月）病床病院（正岡子規）病床病院（尾崎

満眼の生活（徳富蘇峰）中井喜太郎に（尾崎紅葉）白河緱洋に（大町桂月）病床病院（正岡子規）病床病院（尾崎

花に（網島梁川）浜は（内海月枝）南米中州論（竹越三之）洋行する友に與ふ（服部躬治）船室より（内

海月枝）海外にある叔父に寄す（服部躬治）学生上京の可否を問合せ（内海月枝）試験に登第せし友に（服部

躬治）

文範として取り上げられた作品は、服部躬治、内海月枝、大町桂月、正岡子規、尾崎紅葉、徳富蘇峰、網島

梁川等のものが多いことが分かる。これらの普通文が、作文の模範とすべきものとされ、また読書の対象とも
ウ 作文教授の諸問題

ところで、大正中期の作文教育の抱えている諸問題について、当時東京高等師範学校教諭であった玉井幸助は銳く自己の見解を詳述している。長くなるが、この当時の作文教育の実情がよく分かる資料なので、その要点を引用することにする。

作文教授の諸問題（玉井幸助 大正八年）

一、何の作文教授か

○作文教授は第一に自己を明確に自覚させめる作業、即ち心性の修養、第二に自己を発表せしめる作業、即ち技術の練習である。

二、内容の教授か形式の教授か

○単に文章の方法を教授するや、文章の内容を教える。これらは、作文教育の目的を達成するための方法である。

三、自分の作文力が授けられてあれば、卒業後実際世間に出て、その関係する世間的実務に備え、単に形式を形式として教授するのではない。

四、習字及び書取と作文教授

○習字で書かれた文は、如何に内容が善くても悪文である。私は不徹底な今日の習字にきたない文字や誤った文字で書かれた文は、如何に内容が善くても悪文である。
教授を革新して、専ら細字の練習をさせる事にしたいと思う。
書取であるが、此の効果を挙げるのは、反復練習といふ根気によるより方法はない。
漢字の教授は、これまでの様に書取にだけ任しておらず、作文に於て大に力を用ぶべきである。

五、文話の価値如何。

六、講読教授と作文。

○講読教授と作文。

○文の構造、修辞の技巧、慣用語の適用等を教へるように、講読によって授けるようにしたい。

○中学校の作文は文学者を養成する目的ではないから実用の文に力を注げといふ説、殆ど定説として動か

○学校時代に於て、実用といふ点から自己を発展せねばならぬ場合が幾多あるか。彼等の世界は多く趣味

七、他教科と作文。

○本作文教授といふものは、全校通貫の大きな規模の仕組で行ばれなければならぬのである。

八、趣味の作文か実用的作文か。

九、課題が自由選題か。
○課題は、記事・叙事・説明・議論・文式・書簡等の文体、又文語・口語・候文の如き文体に付いて一通り
其の心得を授ける上に於て、是非必要である。私は自由選題尊者の精神保持して、而も課題の必要を唱
なるものである。

十、文体は如何。
○文部大臣が口語の訓令を出して官報に口語文を印刷し、高等學校が文体随意の作文問題を出して従来の束
縛を解くようになった。

十一、添削の中心。
○教師は一通り見閲して注意すべき箇処にそれく記号を付け、生徒各自又は生徒相互に十分添削せしめるのが最も有効である。

十二項目にわたって、大正中期の中等作文教育の当面していた問題点を鋭く具体的に指摘している。それは、

作文ハ平明達意ニシテ實際ニ過スル文ヲ作スレモ尚尚ヲ作品ニ就キ添削批评ヲナスベシ尚特ニ作文ノ時間
ヲ設備学年ニ在リテモ少クトモ隔週一回国語漢文ノ講読ノ時間内ニ於テヲ課スベシ。

作文教育の史的展開

作文ノ第一学年に、毎週七時（国語講読四時、作文二時、文法一時、習字一時）

作文隔週ニ、作文ノ習字隔週ニ（傍線ハ引用者）。
中学校教授要目中改正（昭和二年三月二七日文部省訓令）

ア、要目の主旨

この改正においては、「国語漢文」の項目で作文について次のようないく定めている。

作文ハ正確自由ナル表現ニ就キテ指導シ平明達意ニシテ実用ニ適スル各種ノ文ヲ作ラシメ且其ノ添削ヲ批評ヲ為スペシ

二、作文ハ特別ニ時間ヲ設ケザル学年ニ在リテモ少クトモ週一回講読ノ時間内ニ於テヲ課スペシ（傍線は引用者）

三、時間配当について、第三学年以降は、「作文」の文言はあるが、時数は示されていない。
昭和高等学校
入学試験国語問題集

注意

文字八漢字八楷書二限り平仮名又ハ片仮名ノ使用ヲ禁スノハ
文部省ノ指示ヲ従へ

作文ノ要求

奈良女子高等学校

作文ノ要求

中学校教科教授及び修習指導要目（昭和十八年三月二日文部省訓令）

作文ノ対象

一時間二十分間

中学校教科教授及び修習指導要目（昭和十八年三月二日文部省訓令）

作文ノ対象

文字八縦書き、字数八百字以内、文体ハ随意

作文ノ対象

中学校教科教授及び修習指導要目（昭和十八年三月二日文部省訓令）

作文ノ対象

文字八縦書き、字数八百字以内、文体ハ随意
作文教育の史的展開

作文

三十四時

作文

作業

三十四時

作文

三十四時

作文

三十四時

作文

表二十五

作業

三十四時

作文

三十四時

作文

国文

三十四時

作文

三十四時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文

講読

第一学年

七七時

作文
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
略
教授上ノ注意

作文ニ於テハ情操ヲ涵養シ認識ヲ鍛磨シ国民生活ヲ発展ト国民的自覚ヲ深化ヲ期スピ

一作文ニ於テハ推敲ヲ必要ヲ自覚セシメ且ニ習熟セシムペシ前初学年ニ於テ正確ナル表記法ヲ習得セシ

高一 等女學校における実践

ア改正の主旨

中學校令中改正（明治二四年一ニ月一四日 勘令）

この勘令の第一条は、次のとおりである。

○高等女學校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中學校ノ種類トス

この當時の状況をうかがえる資料をみることにすると。

イ愛媛県の例

私立愛媛県高等女學校規則（明治二四年一〇月開校）

三
全校では、甲種、乙種科は三箇年、丙種科は四箇年を修業年限としている。
授業の課程表は、次のようになっている。

<table>
<thead>
<tr>
<th>科</th>
<th>第一年</th>
<th>第二年</th>
<th>第三年</th>
<th>第四年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>句</td>
<td>五年</td>
<td>五年</td>
<td>五年</td>
<td>五年</td>
</tr>
<tr>
<td>用</td>
<td>六年</td>
<td>六年</td>
<td>六年</td>
<td>六年</td>
</tr>
<tr>
<td>事</td>
<td>五年</td>
<td>五年</td>
<td>五年</td>
<td>五年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表中の「読書」は講読を、「文」は作文を意味していると思われる。
本学では、「漢文」を導入しているのが分かる。

文は語文法、初歩、授業実際、適切、単独記事、消息文、練習セミ、傍線は引用者。
この当時には、次の資料でも分かるように、学習小学校においても高学年になる、
手紙文を学習し、文体は「侯文」を指導していたのである。引き続き、
高等女学校においても、書簡文は習熟には重きを置いたのである。

【小学国文読本】（山県悌三郎編）
文学社（巻之二巻之八 明治二十五年）
国語
初めは普通ノ漢字交り文ヲ講読セシメ漸ク中古以降ノ平易ニシテ雅訓ナル文章及歴ニ及ボシ又日用書類記事

国語ヲ授クルニハ発音及句読ニ注意シ語方話方ニ習熟セシメ文章ヲ作ラシムルニハ簡明著実ニシテ達意ヲ旨

作文教育の史的展開

高等女学校規程（明治二年一月二十九日文部省令）

規程の主旨

この規程によって、学科目、修業年限、入学資格等が明確にされ、修業年限は六箇年で、入学資格は四箇年

小学校の卒業生として、選択されている教材の一部である。

これは、言語教材として、採録されている文章の一部である。

作文規程の目的

作文は、講読」と「作文」に分かれ、二分科で構成された。毎週授業時数については、第一学年と第二学年は毎週五時間、第三学年から第六学年までは毎週四時間となっている。

学科目の程度としては、次のように定められた。
<table>
<thead>
<tr>
<th>漢文</th>
<th>国語</th>
<th>学科目</th>
<th>学年</th>
<th>時数</th>
<th>毎週</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>四</td>
<td>四</td>
<td>第二学年</td>
<td>同上</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>四</td>
<td>同上</td>
<td>第二学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>三</td>
<td>同上</td>
<td>第二学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>三</td>
<td>同上</td>
<td>第二学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>同上</td>
<td>第二学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>同上</td>
<td>第二学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>同上</td>
<td>第二学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>二</td>
<td>同上</td>
<td>第二学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

この当時の実情を次の例にみることにする。愛媛県立松山高等女学校規則（明治二十三年一月五日発令）による。「規則」では、国語の程度を示しているが、その内容は「高等女学校規程」（明治二十八年）と同一である。また、この「規則」では、学科目ごとの授業時数は例示されていない。
国語は講読・作文を中心にして、第三学年からは文法も学習することになっている。なお、漢文は随
意科目であったので、漢文ヲ修メサル者ハテ時間がテ自修ニ充ツ」と注をつけている。

(3) 高等女学校教授要目
(明治三六年三月九日
文部省訓令)

ア 要目の主旨
この要目は、高等女学校令施行規則（明治三四年三月二二日
文部省令）に基づいて発せられたものであ

国語ハ現時ノ文章ヲトシテ講読セシメ進ミテハ近古ノ文章ヲ及ボシテ実用簡易ナル文ヲ作ラシメテ
要及習字ヲ授クヘシ（傍線は引用者）

国語ハ普通ノ言語、文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ更彰スルノ能ヲ得シテ文学上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ

に於て、さらにその内容を詳細に定めたのである。（作文）に関する部分をまとめるとき、次のようになる。

作文
第一学年及第二学年
每週六時（講読四時
文法及作文一時
習字一時）

書取
仮名遣ヲ正シ漢字ヲ字画ヲ正確ナリシメ且速記ニ慣レシムヘシ

復文
口語ヲ今文ヲ今文ヲ口語ヲ訳セシムヘシ

作作文教の史的展開

三五
<table>
<thead>
<tr>
<th>第四学年</th>
<th>毎週五時（講読四時）</th>
<th>作文</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>前二学年</td>
<td>二準ス</td>
<td>作文</td>
</tr>
<tr>
<td>前二学年</td>
<td>二準ス</td>
<td>作文</td>
</tr>
<tr>
<td>前学年</td>
<td>二準シ又論説文ヲ加フ</td>
<td>作文</td>
</tr>
<tr>
<td>教授上ノ注意</td>
<td>作文ノ文題ハ成ルヘク諸学科目ニ瓦リ生徒既修ノ事項ニ就キテハヲ撰フヘシ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>作文ノ達意ヲ主トシ用語ノ為ニ思想ヲ拘束スルヲ弊ナカラシムヘシ</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>九</td>
<td>作文其ノ他書写ノ際ニハ常ニ習字ニ関スル注意ヲ念ルヘカラス又成ルヘク変体仮名ヲ避クヘシ（傍線ハ文語体を求めているのである）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>引用者。</td>
<td>作文の指導内容ハ、書取・復文・作文となっており、中学校に設けられている説文の項目はなし。</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
| この要目においては、復文の項で口語ヲ今文ニとあり、作文の項でも今文体ノあるように文体
なお、文章の種類としては、書翰文、記事文、叙事文、論説文となっており、中学校にあった伝記文を取り上げられていない。

イ 高等女学校の国語

この当時の国語教育の実情の一端を資料にみることにする。国文学者で女学校の教諭であった筆者は次のよう

に述べている。

○私は高等女学校の国語教授は、高等女学校や中学校に於ても、小学校と同じ様に、現代文が国語教授の基

本であるというふる事は述べた迄で、殊更に耳新しい意見を言ふのではな

作文教育が、ともすれば擬古調の文章の作成に傾きがちであったのを憂えての論の一部である。口語文を基

本にしつつも、現代文（文語文）で作文することの重要性を説いている。

ウ 生徒の作品例

次の資料は、明治三十七年度松山高等女学校卒業証書授与式答辞（卒業生物代、松田よしみ）など

何事もあたたかく行の大御代にしだれば、よろこびの道のしやくになるまゝに女の教へもたたいやままに進み行く

こそよろこばしきり限られ、我等数ならぬ身もて学びの庭におりたちしか昨日今日の如く思いしに、（以下略）
「十周年を祝す」

四四・大野・光野

弥生の木の暖かさ師の君の御恵みにあみして、我等が毎親しく瞳みしてしく励む学びの庭、兹に十年の齡を重ねて、祝ふ今日の日を迎えることとはなりぬ。ことなき過ごしさらにさかえることができる。

要目の主旨

この要目的実科高等女学校の名称は、「高等女学校令」、「明治四年四月二日発行、教科書を発行」というものである。

要目では、「国語」、「講読」、「作文」、「文法」、「習字」の四分科となっているのは、前回の改正のものと同一である。

作文に関する事項をまとめるとき、次のようなになっている。

普通文法学校

講読、材料、普通文法学校

普通文法学校

明治三十八年四月二日発行、教科書を発行、教科書を発行、教科書を発行。
八書籍文上級ニ進ムニ随と草案ヲ起サスニ認ムル習慣ヲ養フヘシ

九作文ハ添削ノ際ヲ期ノハニ部分ヲシテ生徒ノ主義ヲ訂正シ得ヘキモノハ符号ヲ附シテ推敲ヲ促シ共通セル

十作文ハ初ハトシトス即題ヲ課シ学年ノ進ムニ随ヒテ漸タヲ減シ宿題ト相半スルニ至ラシヘシ（傍線）

は引用者ノ

同じ時期に出された中学校の要旨と比べてみると、書籍文に重きを置いているのが分かれる。中学校では、「作文ハ現代文ヲトシトス即題ヲ課シ学年ノ進ムニ随ヒテ漸タヲ減シ宿題ト相半スルニ至ラシヘシ（傍線）

在文ノ現代文ヲトシトス即題ヲ課シ学年ノ進ムニ随ヒテ漸タヲ減シ宿題ト相半スルニ至ラシヘシ（傍線）

が主流であった。

イ教科書について

高等女学校において、書籍文すなわち書簡文が重視されていったことを裏付ける資料として教科書を取り上げてみることにする。次の資料は、作文の副読本ではなく、教科書であるが、多くの書簡文教材が採録されてい
巻三（三七課中書簡文二課）
巻四（三七課中書簡文二課）
巻五（三三課中書簡文二課）
巻六（三三課中書簡文四課）
巻七（三三課中書簡文三課）
巻八（三三課中書簡文二課）

夫を養える人の許へ（同返事）
息女への教訓

夫を養える人の許へ（同返事）
息女への教訓

高等女学校及実科高等女学校教授要目（昭和二年三月二七日 文部省訓令）

作文教育の史的展開

図

○国語エ於テハ国語ノ理会及応用ノ能力ヲ得シメ特ニ我が国民性ノ特質ト国民文化ノ由来トヲ明ニスルコトニ

この要目では、「国語」は従前のように、四分科で構成されているが、「国語」の目的・内容を次のように示

している。
○ 材料ハ総てポ正ナル語国語ヲ採りポ体ノ精華ノ、国民ノ美風、偉姫ノ言行ヲ特ニ女子ノ教育ヲ就キテ指導シ平明達意ニシテ実用ニ適スル各種ノ文ヲ作ラシメ且其ノ添削批評ノ等タルベ。

○作文ハ正確自由ナル表現ニ就キテ指導シ平明達意ニシテ実用ニ適スル各種ノ文ヲ作ラシメ且其ノ添削批評ノ等タルベ。

ここでは「国民精神ノ涵養ニ、温良貞恵ナル婦徳ヲ達成スルニ足ルモノニ、文学趣味ニ富ミテ情恵ヲ優雅ナルラジムルモノニ、世界ノ情勢ヲ知ラシメテ円満ナル国民的常識ヲ養成スルニ足ルモノニ、家庭生活ノ趣味ヲ向シセムルニ足ルモノニ、高等女学校修業年限五箇年ノモノニ、作文についての時間配当は次のようになっている。

第一学年
毎週三時（講説三時、作文二時、習字一時）

第二学年
毎週六時（講説四時、作文一時、習字一時）

第三学年
毎週四時（講説四時又ハ三時、作文隔週二時、文法二時、習字一時）

第四学年
毎週五時（講説四時又ハ三時、作文隔週一時、習字一時）

第五学年
毎週五時（講説四時又ハ三時、作文隔週一時、習字一時）

作文に関する内容の項で「実用ニ適スル各種ノ文ニ」については、中学校の箇所で述べたように文部省の解説

なお、作文の内容の項で「実用ニ適スル各種ノ文ニ」については、中学校の箇所で述べたように文部省の解説

なお、作文の内容の項で「実用ニ適スル各種ノ文ニ」については、中学校の箇所で述べたように文部省の解説
道後ヶ丘の拍手の音!!ほとんどの私達の胸は躍った。
県下選手権を得て輝くトロフィーを獲得する喜び
と共に更に明治神宮体育大会への出場を得たのだから。
かねての望みが遂げられたので部員は無上に嬉し
くわその後の練習に専心努力した。（以下略）

作文の配当時間についてまとめるとき、次のようになる。

作文問題
国文：百二時（毎週三時）
文法：三十四時（毎週一時）
講読

第一学年：百七十時（毎週五時）
第二学年：百四十時（毎週五時）

この要目は、中学校令、中学校、実業学校、実業学校における教科「教授方針」、教授事項、等は、中学校のものと同一なので、ここでは触れ
ないことにする。

同時期の文例からも分かるように、文体については事柄の内容・場面等によって、口語体と文語体を使い分
けていたのである。

高等女学校教科教授及修練指導要目（昭和一八年三月二五日文部省訓令）

（校友）昭和五年号
作文
十六時（隔週一時）
戦時下のあただしさの中、工場での勤労奉仕などで満足のいく学习はできなかった。作文教育の定着もそ

わたりに

我が国の作文教育の歴史について、明治五年の「中学校教則要目」から昭和二年八年の「中学校教科教授及修練指

導要目」までの概観したものである。漢文で文章を作っていた時代から、口語体で叙述するようになるまでの間には、種々の省令や訓令によって方向付けがなされてきた。そうした状況の中で、根気強く着実に歩みを進めてきた過程をうかがい知ることができる。長年の実践の中から生み出された成果を、これから指針の場でどのように生かしていくかが今後の課題となるであろう。

昭和二年以後も、教育課程の改訂ごとに種々の提案がなされ、意欲的な指導法の研究が続けられている。しかし、依然として作文力の不足は続いており、現在の国語教育の抱えている大きな問題点である。

参考文献
近代日本教育制度史料第一巻「第三巻」講談社 昭五
国語教育史資料第五巻「東京法令平丸・省令・訓令等は、次の書を参考にして」